

詠む広場

毎日俳壇

井上 康明選

滾る湯に春の筍投げ入れる

和泉市 杉崎 利雄

△評▽春のタケノコは、やわらかく新鮮である。採ったばかりのものを、湯に投げ入れる姿には、季節を迎える喜びがあふれている。田植を了らふ開けつ放しの農具小屋

甲斐市 松田 健嗣

△評▽田植の日の忙しさと華やきが伝わる。農具小屋は開け放たれ、散らかっているのだろう。草田男の田の字大きく夏に入る

宇陀市 泉尾 武則

道糸は綱のごとし鯉釣る

加古川市 伏見 昌子

老人に幼き日あり粽解く

奈良市 奥 良彦

うぐいすの彼岸此岸に鳴き交す

弥富市 富田 範保

白球を置いて黙禱夏の雲

宇治市 濱岡 学

嶺越ゆる雲の速さや遠郭公

鎌ヶ谷市 佐藤 紀子

夏近く金波銀波の波頭

津市 秋山 歩荷

やませ吹くイーハトーブを一人旅

伊賀市 福沢 義男

片山由美子選

螢火のひとつふたつと消えにけり

相模原市 はやし 央

△評▽一つずつ見えてくるといっただけなく「ひとつふたつと消えにけり」が眼目。たぐさんの螢が乱舞していた光景を思う。川幅に波の満ち来る夏始

浜松市 野畑 明子

△評▽河口付近の上り潮の様子だろ。押してくる波の力にこの季節ならではの勢いがある。水羊羹硝子戸を透くひかりかな

東京 青野 曆

更衣鎖骨に薄き髪生まる

加古川市 伏見 昌子

雉鳴く胸を反らせて羽打ちて

町田市 枝澤 聖文

草笛を吹いて野草を食べる会

平塚市 日下 光代

風船を自印に子に従へり

取手市 杉野 龍児

椎の花山を盛り上げ曇らせて

和歌山 馬谷富貴子

著我咲きて母の齢をどうに越え

檀原市 信賀 美保

陽を受けて陽を返しをり柿若葉

野田市 押江 成行

小川 軽舟選

オオタニを知らざる人と春惜しむ

川崎市 折戸 洋

△評▽オオタニを知らずに生きていたとは驚くべき脱俗ぶり。その人と春を惜しめば、自分も仙境の隠者になった気分だ。砲丸を突き出す右手夏来る

宝塚市 藤田 晋一

△評▽砲丸投げは投げるといっよう突き出すのだ。写生の目が効いて夏が来た勢いを感じる。五月雨の隅田川ゆく屋形船

相模原市 はやし 央

雨を飛ぶ燕ごとく胸白き

備前市 中岡なぐれ

生き甲斐を自問自答や春の虹

安中市 大澤信太郎

家族なら離れていても春の月

鳥取 馬野慎一郎

カナヘビが小径横切るみどりの日

沼津市 麻場 育子

にはたつみ青葉時雨の響く朝

山口市 大井 道芥

縄文人は鎌使ひしか藪を採る

柏市 室崎 育美

塀に干す夫婦の靴や山笑ふ

神戸市 山本 仲子

西村 和子選

新緑の七色十色雨に濡れ

岡崎市 加藤 幸男

△評▽新緑の中に若々しい緑もあれば、濃緑もある。雨によってそれぞれの色がみずみずしく光る。自然界を丁寧に描写した。藤房につかまる蜂も風の中

東京 遠藤 智子

△評▽「も」の一語で、一斉に揺れる藤房と必死にすがる蜂とが見えてくる。焦点の絞り方が巧み。波頭かがやき寄せる五月かな

飯塚市 倉田 幸男

新しき風をつれゆく更衣

岸和田市 妙中 正

青嵐列車一本やり過ぎ

大阪市 立川 六珈

鳥の声空へ抜けゆく夏隣

春日部市 田村 照子

ひとすぢの紅秘めてをり白つじ

東京 小島 信子

行く春を髭の神父と惜しみけり

東京 山口 照男

手回しの鉛筆削り昭和の日

東京 鈴木真理子

花冷やパンダのをらぬ動物園

青森市 小山内豊彦

加藤 治郎選

水原 紫苑選

伊藤 一彦選

米川千嘉子選

地震告げる不協和音の鳴る夜に吾子は頼り父へ寄り来る

神戸市 浅田 拓史

神を見ぬ理由にはたと膝を打つ我は神の体内

加古川市 畑 啓之

蟹はもう絶命しおればぐったりと甲羅の砂を

東京 奥山いずみ

人々が論じ合っているわたくしを国の失敗か自

広島市 堀 眞希

＜歌集＞

新刊

＜句集＞

◇山尾玉藻『くればれと』 「火星」主宰の第5句集。うっとりとするようなユーモアを感じる作品が並ぶ。△勝手まきうりぎね顔の団扇かな△吹かれつつ糞虫まきつと地獄耳△流さうめん阿呆らしさうで楽しさう。近年まれに見る楽しい句集。(角川書店・2970円) ◇森田純一郎『森田純の百句』 △毎年の初旅ついに今年なし△なと味わい深い秀句に真摯な解説付きなのうれしい。峠の入門、研究としても欠かせない一冊。(ふうんす堂・1650円) ◇復本一朗選『新選正岡子規俳句集』 芭蕉、一茶に並ぶ有名俳人の正岡子規だが、作品数が多過ぎて普通の人はまず読破出来ない。その作品を精選しテーマごとに分類して、子規を身近にしてくれる一冊。△一休の糞になつたる海風哉。まだまだ知らない子規の句がある。(岩波書店・1221円) (俳人・西村麒麟)

◇栗木京子『夢のあとさき』 2022年から4年間の作品を収録した第12歌集。永井荷風の文学にひかれた日々、日常の巡りだけでなく世界へ目を向けて鋭く戦争を詠む。△ミサイルが撃ち込まれたる空に地に無数の穴のあきしままなり。(本阿弥書店・2750円) ◇浜口美知子『不如帰いづこ』 孫が生まれ自らの病の治療を終えた一方で父や夫や娘婿たちを亡くして命の重みを伝える。第3歌集。△宵はやく雨戸を閉ざすひとり夜の銀河はるけし君すむ銀河。(なからみ書房・2750円) ◇梶原さい子『震災短歌ノート』 東日本大震災のちに『東日本大震災にかかわる歌について』の論考、講演記録、被災地の方々からの震災時や震災後の聞き書きなどを収録。震災から15年経た、貴重な記録である。(短歌研究社・2750円) (歌人・中川和子)

こちらから投稿できます